

現代的家庭科教育ニーズの探究と 衣生活領域の学習内容の構築

後藤 景子・菊地 志乃*

Investigation of modern home economics education needs
and construction of study contents in clothing area

Keiko GOTOH and Shino KIKUCHI*

Accepted June 2, 2006

抄録：家庭科の独自性と家庭生活の現状をもとに、現代的家庭科教育ニーズとして「家庭生活に必要な技能の習得」、「消費者としての自覚」、「グローバルな視点からの生活理解」、および「ライフステージにおける課題認識」を提唱した。家庭科衣生活領域の学習内容の実態を把握するために、小学校および中学校の家庭科担当教員を対象としてアンケート調査を行なった。その結果、授業時数の不足と製作実習に時数が費やされることが原因で、学習に偏りが存在することがわかった。また、小学校と中学校の学習内容を比較検討したところ、分断や重複が存在していることがわかった。現代的家庭科教育ニーズの観点から、衣生活の流れを基本とし、小中一貫した衣生活領域の学習内容を提案した。

牽引語：衣生活教育、現代的教育ニーズ、学習内容、衣生活の流れ

Abstract : Considering the originality of home economics and the present condition of home life, we proposed "Acquisition of Technical Skills Necessary for Home Life", "Consciousness as a Consumer", "Life Understanding from a Global Point of View" and "Theme Recognition in Life Staging" as modern home economics education needs. A questionnaire regarding actual study contents of clothing education was carried out with elementary and junior high school teachers. The results of the questionnaire showed that the deviation of study contents existed because of a lack of total class time and the necessity of ample class time for clothing production practice. Furthermore, it was found that the curriculum regarding clothing education was divided and overlapping in elementary and junior high schools. The needs for consistent clothing education were demonstrated and a five-year program was presented on the basis of the clothing life cycle.

Key Words : clothing education, modern education needs, study contents, clothing life cycle

* 大阪市立瓜破中学校（平成 17 年 3 月京都教育大学教育学研究科家政教育専攻修了）

1. 緒言

現在、教科の目標や内容の変更だけでなく、教科の存廃・統合等も視野に入れた教育改革が予測されている¹⁾。このため、家庭科においてもそのアイデンティティを改めて自問しなければならないことが指摘されている²⁾。家庭科は生活者として自立する能力や家庭を築き経営していく能力を育て、さらに、変化する社会に主体的に対応して、新しい生活文化の創造に取り組む意欲と態度を育てる役割を担っている³⁾。将来の家庭科教育を展望する上で、学校教育の中で家庭科が果たしてきた役割を再評価するとともに、その独自性を明確にしていく必要がある⁴⁾。また、急激に変化している生活様式、家族の状況、子どもたちの現状などを的確に捉え、家庭科の内容を見直すことも必要である。

この点に関して衣生活をみると、既製服が定着した現在では、家庭で衣服を製作する機会は殆どなく、衣服は購入して着用・手入れを行うものとなっている。このように衣生活は大きく変化しているにもかかわらず、現行の衣生活領域の内容は依然として製作を中心とした衣服を生産する立場で構築されている。小中学生の衣服の手入れに関する現状をみると^{5, 6)}、小学生の7割が洗濯物を取り込んでたたむ経験をもつが、洗濯物を干した経験があるのは3割にすぎない。中学生では、日常着の整頓を8割、ほころび直しを5割、自分の衣類の洗濯を2割が、それぞれ自分で行っている。このように衣服の手入れに関する小中学生の実践率は低い。一方、衣料マーケットの対象が低年齢化し⁷⁾、とくに女子小中学生を中心にファッションへの興味・関心が高まっている。このような子供たちの現状を踏まえ、衣生活の実情に即して消費者サイドに立った学習内容にシフトしていく必要があると考えられる。

本報では、家庭科の独自性と家庭生活の現状に照らして、家庭科教育に求められるものは何か、すなわち現代的家庭科教育ニーズについて論じる。次に、小中学校における家庭科の授業実態に関するアンケート調査を行い、現代的家庭科教育ニーズの観点から現行の家庭科の学習内容における問題点を示す。最後に今後の家庭科衣生活領域で学習させたい内容を提案する。

2. 家庭科教育の独自性と現代的家庭科教育ニーズ

家庭科の目的や学習内容と共通点をもつ教科等に「道徳」、「生活科」および「総合的な学習の時間」が挙げられる。「道徳」は教科教育ではなく、その指導対象は学校の教育活動全体であり⁸⁾、学習の形態や指導方法において家庭科とは異なる点が多い。「生活科」は生活を題材としている教科であり、家庭生活を題材としている家庭科と共通点をもつ。しかし、家庭科は家庭生活における自立を目標としているが、生活科は自分自身や自分の生活について考えさせ、自立への基礎を養うことを目標としている⁸⁾。「総合的な学習の時間」は総合性をもつという点で家庭科と共通しており、取り扱うテーマである労働問題、環境問題、老人福祉、情報化社会、国際化等⁹⁾が家庭科と重なる部分が多い。しかしながら、「総合的な学習の時間」では、教科横断的な総合的課題を扱うのに対し⁸⁾、家庭科は対象とする生活が総合体であり、人間性豊かな家庭生活の向上に目標をおく教科である⁹⁾。

このように、家庭科は他の教科等とは異なる目標をもつが、さらに一步進んで家庭科の独自性とは何であろうか。家庭科教育研究者の多くは、家庭科の独自性が「実践的学習活動による家庭生活に必要な基礎的技能の習得と、家庭生活の営みを総合的に捉えた主体的な家庭生活認識形成、家庭的資質

育成教育を行う」ことにあると考えている。例えば、岡田¹⁰⁾は、家庭科は衣食住にかかわる内容を中心に他教科および他の教育活動よりも最も深く家庭生活指導にかかわり、とくに現在は家庭生活指導の大部分を負っている教科といっても過言ではないと述べている。また、佐藤¹¹⁾は、小・中・高等学校の学習指導要領に示された家庭科は、時代や社会・家庭生活の変化によってその意味内容は異なるが、家庭生活認識形成と家庭的資質育成を教科目標に掲げてきたと述べている。つまり、家庭科の独自性は学ぶ対象や認識の対象が家庭生活であり、生活の向上を目指していくところにある⁹⁾。

このような独自性をもった家庭科に対し、現代の学校教育は何を求めているのだろうか。本稿では、このような見解を家庭科の独自性に立脚する「現代的家庭科教育ニーズ」と呼ぶ。生活を営む上で必要とされる基礎的な技術・技能を習得し、それを生活に生かす能力を育成することは時代を越えて家庭科に求められていることである。現代の家庭は衣服の生産機能が極めて限定的になっており、しかも衣料が多様化していることから、衣服の購入、着用およびメンテナンスのための知識や技能が必要となっている。家庭生活認識形成や家庭的資質育成を行うには、これらを身につけ、消費者としての自覚をもたせることが重要である。また、家族を含め社会のいろいろな人との関係の中で自分の生活が成り立っているということを理解させることも大切である。さらに、これからのライフステージにおける課題に触れ、それに対応する問題解決能力の育成が求められる。以上の点から、本研究では「現代的家庭科教育ニーズ」として、「家庭生活に必要な技術・技能の習得」、「消費者としての自覚」、「グローバルな視点からの生活理解」、および「ライフステージにおける課題認識」の4つを挙げる。

3. 家庭科の授業内容に関するアンケート調査および結果

家庭科衣生活領域の内容を検討するにあたり、平成16年6月に京都府下の小中学校で前年度の授業内容に関する調査を行った。設問項目は、回答者の属性、1年間の家庭科総授業時数、並びに衣生活領域における学習内容とそれぞれの授業時数、授業形態、および教材の提示法である。学習内容は学習指導要領や文部科学省検定教科用図書を参考に分類した。調査対象者として、平成15年度京都府学事関係職員録から教諭数16名以上の学校（公立小学校171校および公立中学校126校）を抽出した。調査用紙の配布および回収は郵送で行い、回答は無記名とした。回収率は小学校が23.4%、中学校が26.2%であった。

小学校からの回答者は約9割が女性で、約7割が教師歴20年以上であった。第5学年と第6学年の担任が約7割であり、家庭科を専門として学んだことのある回答者は1割程度にすぎなかった。1年間の家庭科の総授業時数は、第5学年、第6学年ともに大半が51～60時間であり、学習指導要領で定められている授業時数（第5学年で60時間、第6学年で55時間）と一致していた。このうち、衣生活領域の授業時数について、学年別および学習内容別にまとめたものを図1に示す。全体に第5学年のほうが授業時数が多いことがわかる。「衣服の働き」「日常着の着方」および「日常着の手入れの必要性」については、第5学年においては約7割が、第6学年においては約6割が全く履修しておらず、小学校では履修しない場合が存在する可能性が示唆された。「製作」については、履修しないのはいずれの学年でも5割以下で、5時間以上履修するという回答が半分程度あった。授業形態、および教材の提示法を図2に示す。ここで複数の項目を回答した場合は、それぞれを1項目ずつ加算して集計した。「ボタンつけや洗濯」「手縫いの練習」「ミシン縫いの練習」および「製作」は、いずれも7割以上が実

習で行っていた。一方、「衣服の働き」「日常着の着方」「日常着の手入れの必要性」および「布の性質」は6割以上が講義形式であるが、実験も少数見られた。教材の提示法については、どの学習内容でも板書と教科書を合わせると6～9割を占め、配布資料を用いているのは1～2割程度であった。

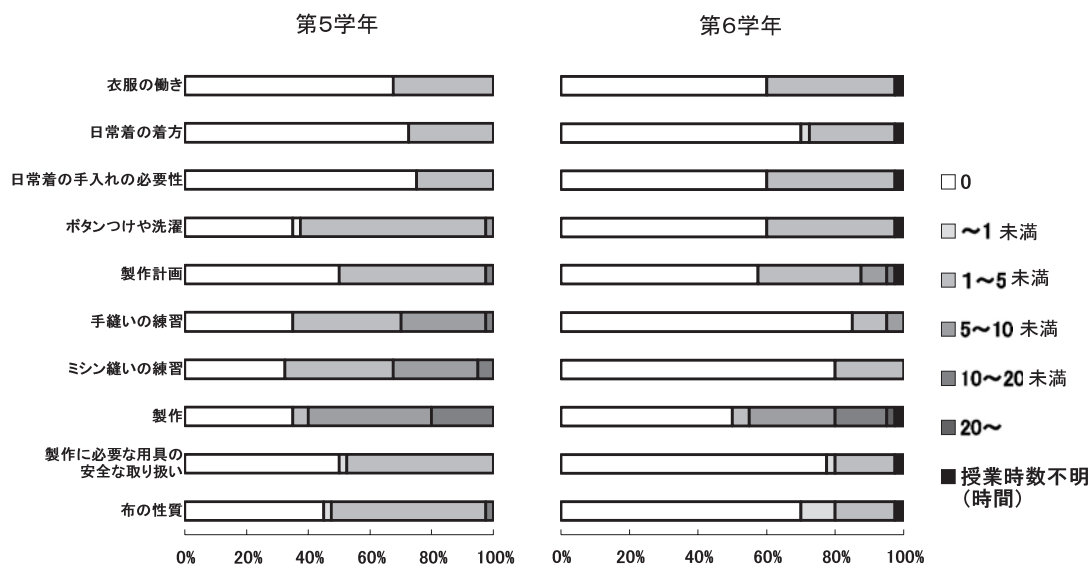


図1 小学校家庭科衣生活領域の授業内容別の授業時数

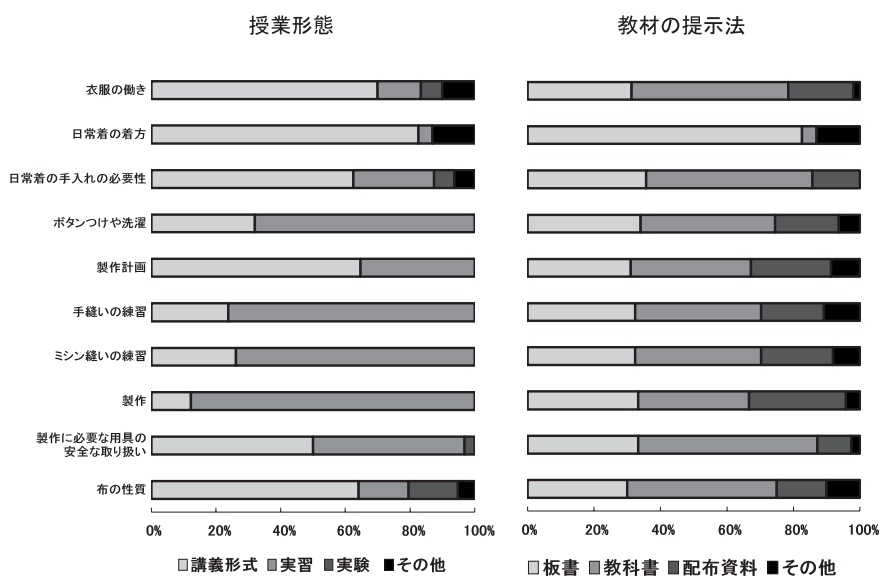


図2 小学校家庭科衣生活領域の授業内容別の指導法

中学校では、回答者は全員女性で、教師歴は11～20年が4割強、21～30年が5割弱であった。1年間の家庭科（必修）の総授業時数は8割強が40時間以下という結果であった。衣生活領域にあてられた授業時数について、学年別および学習内容別にまとめたものを図3に示す。3学年を比較すると、衣生活領域は第1学年で履修する傾向があり、第2学年ではどの内容も2～3割程度しか履修されておらず、第3学年では殆ど履修されていなかった。第1学年において、「衣服の着用目的」「衣服の選

択」「衣服材料の性質」「衣服の手入れ・洗濯」および「衣服の補修」は履修率が5割を超えたが、その大半は授業時数1～5時間であった。一方、「衣服の構成」と「衣服の製作」は履修率が低かった。また、5時間以上の履修が認められたのは「衣服の手入れ・洗濯」「衣服の補修」および「衣服の製作」である。なお、家庭科（選択）の結果は省略するが、3学年とも「衣服の再利用」および「衣服の製作」以外は殆ど履修されておらず、「衣服の製作」は第2および3学年で2割前後に5時間以上の履修が認められた。授業形態、および教材の提示法を図4に示す。授業形態は、「衣服の補修」および「衣服の製作」では実習がほぼ9割で、それ以外は講義形式が6割以上であった。また、「衣服材料の性質」および「衣服の手入れ・洗濯」では、実験が1～2割見られた。教材の提示法については、どの学習内容でも板書、教科書、配布資料の割合に大きな差異はなく、これら3つを組み合わせる授業が展開されていると考えられる。

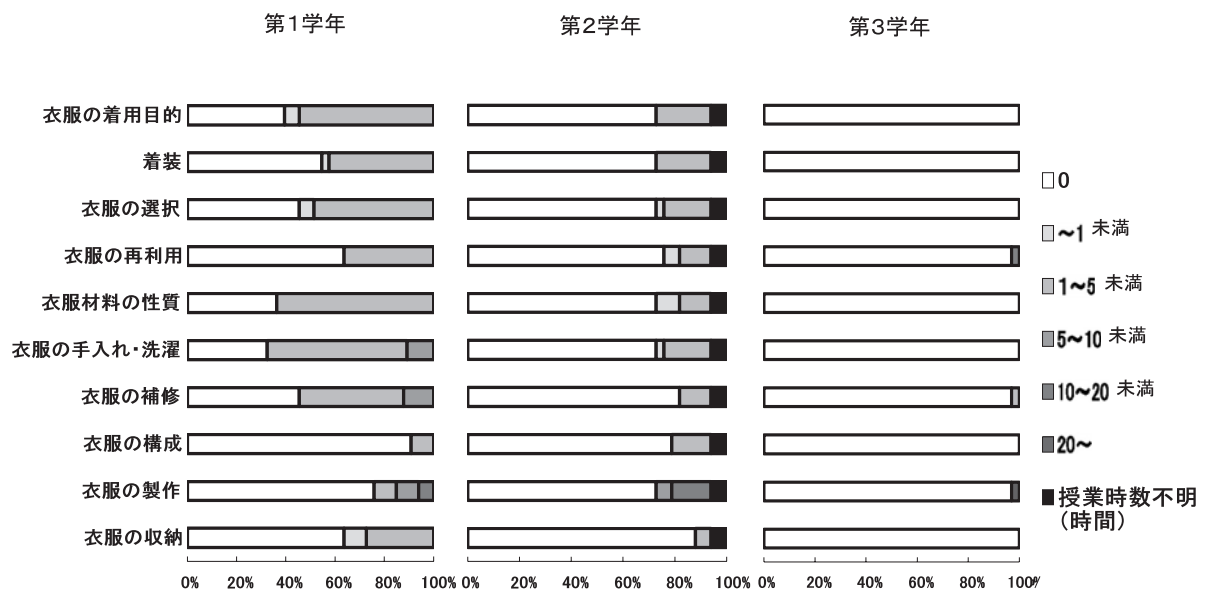


図3 中学校必修教科としての家庭科衣生活領域の授業内容別の授業時数

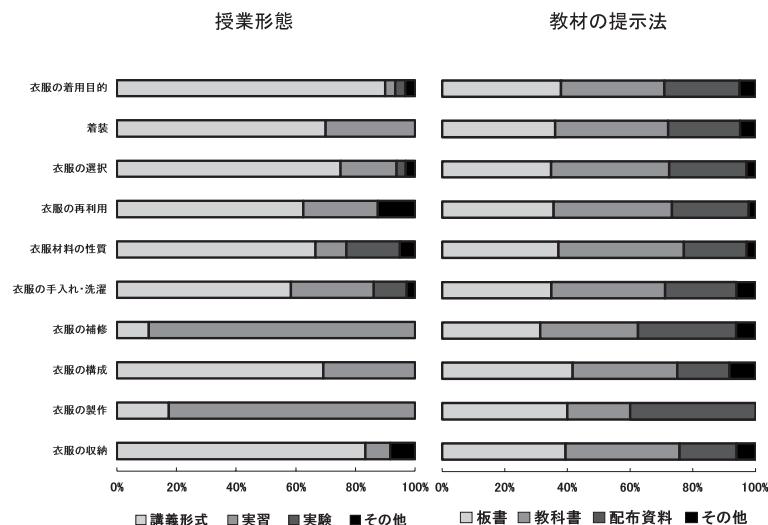


図4 中学校家庭科衣生活領域の授業内容別の指導法

4. 家庭科衣生活領域の内容に関する問題点と改善の方向性

小中学校の家庭科の授業実態に関するアンケート結果から、履修内容にかなりの偏りがあることがわかった。例えば小学校の場合、製作に多くの授業時数が割り当てられており、学習指導要領上教えなければならない学習内容が完全に実施されていない。例えば、衣生活学習の動機付けとなる衣服着用の目的や、衣生活の実践に不可欠な日常着の着方等が教えられていない可能性がある。一方、中学校（必修）においては、「衣服の着用目的」「衣服材料の性質」および「衣服の手入れ・洗濯」を除く学習内容の実施率は3学年合わせて100%に満たない。とくに、「衣服の構成」および「衣服の製作」の実施率は低く、一部の学校では「衣服の製作」を選択教科の中で行っている。小中学校における製作実習に関しては、多くの時数を要する以外にも幾つかの問題点も指摘されている。例えば、実習室およびミシン台数の不足やミシンの調整、家庭科を専門に履修していない小学校教員の指導力不足、並びに大人数の実習を1人で担当することの難しさなどがある。

次に、小学校と中学校での学習内容の継続性について見てみよう。甲斐は¹²⁾、戦後の家庭科教育の歴史の中で、「小・中の一貫性」に注目した教育内容が構成される機会が少なかったことを指摘している。さらに、人生の基礎づくりという視点から、学校教育には生涯教育のベースとしての役割を明確にすることが要請され、教科、校種や学年の枠を越えた統合的カリキュラム構想が必要になっていると述べている。とくに、家庭科は生活力の育成を担っており、生涯教育へつなげるべく小・中の一貫性を考えた構成を必要とする。

しかしながら、小学校と中学校での学習内容の継続性については、学習指導要領の観点から幾つかの問題点がある。例えば、「衣服着用の目的」という内容についてみると、小学校で保健衛生上や生活活動上の目的を、中学校で社会生活上の目的を取り上げている。しかし、衣服の購入や着用という観点からは、衣服の着用目的に関する総合的理解を早い段階から身につけるほうが望ましいと考えられる。また、製作に関しては、小中学校で段階的に進めていくほうがよいと考えられる。つまり、小学校では手縫いを習得させ、衣服の補修としてのボタン付けやほつれ直しを主に行い、興味・関心を高めるために簡単な作品をつくる。中学校ではミシンを使った製作を中心に行う。洗濯については、現行では小学校では手洗い、中学校では洗濯機洗いを扱っている。いずれも洗濯手順の理解と習得に重点がおかれ、汚れ具合や衣料の状況による両者の使い分けについての説明が不十分であると考えられる。このため、日常生活での実践という観点からの学習にはなっていない。

以上、学習内容の偏りや小中学校の継続性など衣生活領域の内容に関する問題点を挙げたが、これらをどのように改善していくかについて、現代的家庭科教育ニーズの観点から述べる。先に述べた4つの現代的家庭科教育ニーズの中でとくに衣生活領域の学習で期待されるものとして、まず、「家庭生活に必要な技術・技能の習得」および「消費者としての自覚」が挙げられる。既製服を購入して消費する現代の衣生活を考えると、衣服の製作が日常生活に必要な基礎的な技能とは言えない¹³⁾。にもかかわらず、教科書の扱いや授業時数において、むしろ製作に重点がおかれていることは問題である。また、製作の内容では、ミシンを使って作品を完成することより、衣服の手入れという観点からボタン付けやほつれ直しを習得することが実生活では重要であろう。また、被服の購入や着用の観点からは、布で身体を覆うという衣服の基本的な構成や着装の学習が欠落している。さらに、衣生活領域の学習で期待されるニーズとして「グローバルな視点からの生活理解」が挙げられる。例えば、グローバル化の中で、日本における衣料品マーケットには9割以上の輸入品が流通している。私たちの生活と国

際社会とのつながりについて衣生活を通して認識させることも可能であろう。

5. 家庭科衣生活領域の授業内容の構築



図5 衣生活の流れを基本とした小中学校家庭科学習内容

以上の議論をもとに、小学校高学年と中学校の5年間を通して家庭科衣生活領域で学習させたい内容をまとめ、図5に示す。学習項目は衣服の購入から廃棄までの衣生活の流れを基本に9項目を設定し、各項目の授業時数を数字で示した。具体的な学習内容を履修順に下記に述べる。

小学校では、まず「衣服の着用目的」について、総合的に理解させる。次は「衣服の構成」を理解させるために、不要になった衣服を分解し、パーツを平面上に並べる。その後、安全ピンや洗濯バサミ等を用いて、再び衣服の形をつくる。「衣服の製作」では、手縫い（並み縫い、返し縫い、かがり縫い、まつり縫い、ボタン付け）および用具の安全な取り扱いなど、製作の基礎を習得させる。次に、「衣服の選択・購入」の際に必要な衣料品の表示について学習することで、衣服に対する興味を引き起こし、消費者としての自覚を身に付けさせる。「衣服の着方」では季節ごとに快適に過ごす着装のポイントを学習する。「衣服の手入れ」では、衣服の補修、洗濯および収納を扱う。補修では衣服の製作で習得した手縫いを用いて、自分が使用している衣服の補修を行う。洗濯は手洗いを扱うが、洗い方の

手順を習得させるだけではなく、洗濯機洗いとの違いや部分洗いとしての利用を考えさせる。収納では衣服の損傷をさける収納の基本を理解させる。「衣服の再利用・廃棄」については衣服が不用になる理由を挙げ、「衣服の製作」で習得した手縫いを用いて不用衣料を使った小物の製作を試みる。衣料のリサイクルの現状を紹介し、身近な題材から環境問題を考えさせるきっかけとしたい。

中学校においては、小学校で学んできた内容を基礎に、各論的な内容も盛り込む等、より発展的な学習を設定した。その際、小学校との学習内容の重複を避けるよう考慮し、授業時数が有効に活用できるように学習内容を設定した。まず、「衣服の材料」を履修する。布から繊維を取り出す分解実習を行い、布・糸・繊維について学習する。とくに布の性質については、綿、毛、ポリエステルなど繊維による違いだけでなく、織物や編物といった布構造による違いを理解させる。「衣服の製作」ではミシン縫いを習得し、簡単な製作を行う。「衣服の手入れ」では洗濯を中心として、洗剤の種類や特徴、衣料の状況を考慮し、小学校において学習した部分洗いも生かして、洗濯機を用いた効果的な洗浄法について学習する。洗濯に続いてアイロンのかけ方を実習する。現代の衣生活では、衣服の流通を調べ、海外の人々とのつながりを実感する。

以上述べた学習内容を実践することで、衣生活の流れを基本として、小中一貫した衣生活領域の学習を行うことができると考えられる。また、「家庭生活に必要な技術・技能の習得」、「消費者としての自覚」および「グローバルな視点からの生活理解」といった現代的家庭科教育ニーズを達成し、自立した生活者の育成を図ることができると考えられる。

6. 結論

現在の学校教育において家庭科が期待されている役割「現代的家庭科教育ニーズ」として、「家庭生活に必要な技術・技能の習得」、「消費者としての自覚」、「グローバルな視点からの生活理解」、および「ライフステージにおける課題認識」を挙げた。

家庭科衣生活領域の学習内容について、小学校および中学校の家庭科担当教員を対象として行ったアンケート調査の結果、家庭科衣生活領域の履修内容は授業時数の不足と製作実習に時数が費やされることが原因で、学習に偏りが存在することがわかった。また、小学校と中学校の学習内容は分断や重複が存在しており、小中一貫した家庭科学習内容の構築が必要であることがわかった。

現代的家庭科教育ニーズの観点から、衣生活の流れを基本として、小中一貫性を考慮した衣生活領域の学習内容を提案した。この提案の実現には現行の学習指導要領の一部改訂が必要である。さらに、この提案に沿った授業実践には現場教員の力量が不可欠である。とくに、全教科を担当する小学校の場合、具体的な教材の提供などカリキュラム実施についての様々なサポート体制が必要となる。今後の家庭科教育の動向を見守りたい。

謝辞

家庭科の授業内容に関するアンケートにご協力いただきました京都府下の小学校および中学校の家庭科担当教員の皆様に深く感謝いたします。

文献

1. 首相官邸, 会議等一覧, 国民教育改革会, <http://www.kantei.go.jp/jp/kyouiku/houkoku/>
2. 朴木佳緒留, 家庭科教育の原点を考える, 家庭科教育, 75 巻, 9 号, pp.6-10, 2001
3. 高部和子, 学校教育と家庭科教育, Asset ビジュアル家庭科教育実践講座第 1 巻, ニチブン, 1998, pp. 22-27
4. 矢野由起, 家庭科教育の意義と課題, Asset ビジュアル家庭科教育実践講座第 1 巻, ニチブン, 1998, p. 228
5. 中澤 智恵, モノグラフ・小学生ナウ, VOL. 19-3, ベネッセ教育研究所, pp. 24-39, 1999
6. 鮎田崎子, 中学生に対する着装教育を考える－実態調査の分析を通して－, 家庭科教育, 75 巻, 1 号, pp. 33-37, 2001
7. 日本家庭科教育学会編, 家庭科の 21 世紀プラン, 家政教育社, 1998, pp. 53-76
8. 文部科学省, 学習指導要領, 国立印刷局, 2004
9. 武藤八恵子, テキスト家庭科教育, 家政教育社, 2000, pp. 202-213
10. 岡田みゆき, 小学校における家庭生活指導について－「家庭科」と家庭生活指導とのかかわり－, 日本家庭科教育学会誌, 44 巻, pp. 231-241, 2001
11. 佐藤園, 家庭科の本質(第 1 報)－平成元年版学習指導要領家庭科における家庭的資質育成教育－, 日本家庭科教育学会誌, 44 巻, pp. 3-12, 2001
12. 甲斐純子, 小・中学校の一貫性を考えた内容, Asset ビジュアル家庭科教育実践講座第 1 巻, ニチブン, 1998, pp. 68-72
13. 高木直, 被服製作の今日的意義, 家庭科教育, 75 巻, 3 号, 家政教育社, pp. 12-16, 2001